

羅生門

（書き下ろし）

扱も源の頼光は 丹州大江山の鬼神を隋へしより此方 貞光季武綱公時
此の人々を伴ひ 朝暮参会仕り候 今日も又雨降り徒然にて 伴い語らふ
諸人に神酒を進めて盃の取り々なれや梓弓 矢猛心の一つなる 兵の交わ
り頼みある中の酒宴かな

源頼光 「いかに保昌」

平井保昌 「御前に候」

頼光 「此の程都に珍しき事は候はぬか」

保昌 「さん候九条の羅生門にこそ鬼神の住で 暮れば人の通らぬ由申候」

渡辺綱 「暫く土も木も 我が大君の国なれば 何処か鬼の宿と定めんと聞く時は仮
令鬼神の住めばとて住せて置かるべき 斯る疎忽なる事を仰せ候ものかな」

保昌 「何と某が御前にて疎忽を申候や」

綱 「中々の事」

保昌 「誠左様に思召さば 今夜にもあれ羅生門に行き御覧候へ」

綱 「扱も某が行まじき者と御覽じ限りて承り候由 さらばこれより羅生門へ
行き 標を立てて帰るべし」と さもあらげなく言いければ 満座の輩一同
に、是は無益と支へける

綱 「いや保昌に対して遺恨はなけれども 一つは君の御為なれば標をたべ」と申し
けり

頼光 「實に綱が申する如く 標を立て、帰るべし」と札を取り出でたびければ
綱は標を給はりて 御前を立て出にける

扱も渡辺の綱は仮初の人の言葉の争により 鬼神の姿を見んために 物の具
取つて肩に掛け 同じ毛の兜の緒をしめ 重代の太刀を佩き 猛たる馬に
打乗つて 舎人をも連れず只一騎 宿所を出で、一條大宮を南頭に歩ませた
り春雨の音も頻に更くる夜の 東寺の前を打ち過ぎて九条表にうつて出で
羅生門を見渡せば 物凄じく雨落ちて 俄に吹き来る風の音に、駒も進ま

ず高嘶し身振してこそ立たりけれ 其の時馬を乗放ち 羅生門の石段に
上り 標の札を取り出し 壇上に立て置き帰らんとするに 後より甲の
鎧を捉んで引き上げければ すはや鬼神と太刀抜き持つて切らんとするに
取つたる甲の緒を引きちぎつて 覚えず壇より飛下りたり 斯くて鬼神は
怒りをなして 持つたる甲をかっぱと投げ捨て その丈衡門の軒に等しく
両眼月日の如くにて綱をにらんで立つたりけり

綱は騒がず太刀指しかざし 汝知らずや王地を犯す 其の天罰のがるま
じとて掛りければ 鉄杖を振上げゑいやと打つを 飛び違つて丁と切る
切られて組付くを 扱う剣に腕打落され 怖むと見えしが脇築地に上り、
虚空をさして上りけるを 慕ひ行けども黒雲覆ひ 時節を待て又取るべし
と呼はる声もかすかに聞ゆる鬼神よりも、恐ろしかりし綱は名をこそ上げ
にけれ